

324

538

事故本

p61以降  
欠ページ

1996.10.29



始





トエ3D-2  
11-304

324-538

國民教育之本源  
全  
一名純心神道

大正  
6. 8. 29  
内交



詔勅

皇祖神勅

天照大神乃賜天津彥彥火瓊瓊杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙  
劍三種寶物（中略）勅皇孫曰

葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可王之地也宜爾皇孫就而  
治焉行矣寶祚之隆當與天壤無窮者矣

天照大神手持寶鏡授天忍穗耳尊而祝之曰

吾兒視此寶鏡當猶視吾可與同床共殿以爲齋鏡





又勅曰

以吾高天原所御齋庭之穗亦當御於吾兒

（以上日本書記）

二

高皇產靈神神勅

吾則起樹天津神籬及天津磐境常爲吾孫奉齋矣汝天兒屋命大玉命宜持天津神籬降於葦原中國亦爲吾孫奉齋焉乃使二神陪從天忍穗耳尊以降之

神武天皇詔勅

建樞原宮令

自我東征於茲六年矣賴以皇天之威凶徒就戮雖邊土未清餘

妖尙梗而中洲之地無復風塵誠宜恢廓皇都規摹大壯而今運屬此屯蒙民心朴素巢棲穴住習俗惟常夫大人立制義必隨時苟有利民何妨聖造且當披拂山林經營宮室而恭臨寶位以鎮元元上則答乾靈授國之德下則弘皇孫養正之心然後兼六合以開都掩八紘而爲宇不亦可乎觀夫畝傍山東南樞原地者蓋國之壤區乎可治之

（日本記）

祀天神詔

我皇祖之靈也自天降鑒光助朕躬今諸虜已平海內無事可以郊祀天神用申大孝者也乃立靈疇於鳥見（中略）以祭皇祖天神焉

（以上日本書記）

三



明治天皇詔勅

天神地祇及列聖神靈ヲ鎮祭スルノ詔

朕恭惟

大祖創業崇敬

神明爰撫蒼生祭政一致所由來遠矣朕以寡弱夙承

聖緒日夜悚惕懼天職之或虧乃祇鎮祭

天神地祇

八神暨

列皇神靈千神祇官以申孝敬庶幾使億兆有所矜式

明治三年正月三日

皇靈遷座ノ詔

朕恭ク惟ミルニ神器ハ天祖威靈ノ憑ル所歷世聖皇ノ奉シ  
テ以テ天職ヲ治メ玉フ所ノ者ナリ今ヤ朕不逮ヲ以テ復古  
ノ運ニ際シ忝ク鴻緒ヲ承ク新ニ神殿ヲ造リ神器ト列聖皇  
靈トヲコ、ニ奉安シ仰テ以テ萬機ノ政ヲ視ントス爾群卿  
百僚其レ斯旨ヲ體セヨ

明治四年九月十四日

教育ニ關スル勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツル  
コト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシ



テ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育  
ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦  
相和シ朋友相信シ恭儉己ヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ  
業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進ンテ公益ヲ廣  
メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ  
義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キ  
ハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺  
風ヲ顯彰スルニ足ラン

ヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名 御璽



自序

余の生れし家は小丘の南西麓にあり。溪谷を隔て、鎮守の森と相對す。幼時より常に社頭の松の蒼然たるを眺め、朝に神鈴の鏘然を聞き、夕に廟燈の燦然に浴し、長ずるに及んで印象特に深く、余が先天的敬神の念思ふに將に茲に兆せしならんか。吾が國明治維新以降泰西の風教を輸入し、其の神州固有の國民的思想は漸くこれより混沌の狀を呈し、遂に適從に迷ふなきかを憂へしむるに至れり。蓋しその世界に國を立つるや、大小強弱の別なく、各其の民族の幸福を希圖せざるごころのものなし。而してこれが希圖をして充分にその目的を達せしめんには、實に國民に自主の精神を必要とす。而して其の自主



二  
の精神は國民的信念の確立にある也。抑も吾邦は古き歴史を  
有し、國家は儒佛の教百科の學を攝取し、櫻花の爛熳と共に和  
魂を練り、日本刀の利銳と共に士道を發揮し、上下三千載その  
精華を保維し來りたるもの、これが根原をなせるものなかる  
べからずと、余や乃ち其の日本思想の根原を温ねて以てこれ  
を養成せん事を念せり。然るに余や非才寡聞且つ高識の知  
己を有せず、學ぶに常の師なく、問ふに我れを益せしむるの友  
なし。唯耳に鼓し、目に觸るゝに従ひ、想像して茲に民族精神の  
本源にして且つ諸教の祖道たるものは、則ち敬神の大道なる  
べきことに想到し、多年叩慮思索する所あり、不可思議の靈智  
自から大道の原理を認識せしむるもの少からず。今其の大要

を錄せんと欲するに當り、我れ復た文字の素養なく、學說の鏡  
面に映ぜしむること能はず。これ純然たる自我的獨創たれば、  
その定説に添はざるもの素より多々あらんを信ず。請ふ大方  
の君子批判を吝むこと勿れと爾云ふ、

大正四年一月上浣

萬有 尾形惣三郎誌



# 國民教育の本源

一名純正神道

## 目次

一	緒論	一
二	中心觀念	七
三	敬神觀念	一六
四	道德觀念	二二
五	民族精神	二六
六	國民教養	二九
七	純正神道	三七
八	結論	五七



# 國民教育の本源

一名純正神道

萬有 尾形惣三郎著

## 一 緒 論

人智の進歩は社會の文明を生ず。社會の文明は交通其の他百般の利便興りて、以て世界の縮小的現象を來たす、その縮小的現象を來たせるの世界に生存せんには、奈何にも氣忙はしくして而してその心の落着かざるものなり。斯くの如くにして止まざれば、則ち人類界の促進に障害を顯はし、以て茲に人間界に於けるの大缺陷を惹起せんことあらんも計られざるなり、是を以て人

安人心の不  
移文明の推



には其の心の安靜とその氣の休養とを求むるの必要あり、而してこれを求め得るの途は他なし、其の物質と精神との兩方面に涉り、これが調和をなせるところの點に信念を置かざるべからざるなり。

二

按ずるに坤輿上に於ける文明海の潮流は、亞細亞洲の西南部に屬する高原地方に起り、以て一は東漸して印度、支那、朝鮮を經、我が日本に入りて止まり、又その一は西漸して歐羅巴を經、亞米利加に至る、今やこの兩漸の文明的潮流は太平洋を越えて、將に相接觸せんとするの氣運に會せり。

蓋し東漸の文明は年代古くして縦に深く根ざし、西漸の文明は年代淺くして横に廣く延び、其の趣き自から異なり、以て縦に深

きものは理想に涉り、横に廣きものは現實に流る、理想に涉るものは精神的となり、現實に流るゝものは物質的となる、而してその東西兩思想の相違は遂に茲に一大溝渠を穿鑿せんとするものの如し、然れども余はこの一大溝渠は人類界の安穩なる發達を永久に遂げしむるの利益を得んと欲せば、必ずやこれが排除をなさざるべからざることを信するものなり、嗚呼これをなすことこれを如何せば當に可なるべきか、今夫れ譬へば爰に一線を以て圓形を畫くものありとせんに、線端の相合ふ處多少の齟齬を見しことあらんも、努めて之を接近せしむれば遂には圓環となるものなりと雖も、而ももし之をその儘に放任するものと思せんか、内に向ふものは益々内に入りて以て少環となり、外に向

三



ふものは益外に出で、以て大環をなし、その極は大なる渦巻きと化し畢らんものにあらずや。若し人類の思想にして斯くの如きことゝならんか、其の結局は急湍船を覆すの危険を生じ、以て遂には世界の大變亂を起し人類の危機を招致するに至らんとす、これ誠に恐怖せざる可からず、故に余は切に思ふ、此の東西兩思想の調和は必ずこれを爲さざる可からずと、而して吾人今我が日本帝國の位置を考ふるに、地理の上よりせば實に東半球の東壁となり、東西兩思想の大溝渠たるべきところの大平洋西岸の堤防たり。この調和の責に任するに於ける地球上最大優良の地位を占め、歴史上よりして見れば、上下三千年一貫不變の國體を有し、萬國無比と稱するところのもの、其の東西文明の調和を

なし思想的圓環の結合者となり、條軌を愆たず、轉輾圓滑ならしむることを得せしむるところの責任は、寔に我が日本帝國の双肩に懸れりと云ふべく、即ち我が日本帝國は世界平和の關鍵を握れる所の天使として、思想界の中心とならざる可からざるものなり。而してその眞實平和の宣傳は道德を基礎として立てる所の國家の使命なり、而して此の使命を果さんには、必ず當に世にその國民の徹底せるところの信念と強烈なる努力とを要すべく、以てその徹底せる信念をして起さしめんには、則ち民族的自覺をなさしむるの必要あり、これが自覺の起れる機會は、非常の場合ならざる可からず、大なる國難に遭遇するの曉か、又更に大なる發展をなすにあらざれば人類の平和を破壊せらるゝ虞



あるときにあり、而して吾人が今日斯の自覺を必要とするは、世界人類の危急を救済するの意義に於いて其の勇を鼓し、仁を施す、平和の中心たらんが爲めなり。然れども今日の日本民族が果して能く斯くの如き信念を有せるものなりとすべきか、又或はよく之れを振起するの能力ありとすべきか、我が日本帝國國民は今や三千年間金甌無缺の國體を擁護し來たり、猶ほ天壤無窮に萬邦冠絶の皇運を扶翼せんと欲するは、地の利に於いて天佑を得居ること蓋し其の一つの力たるべきものなれども、其の他に於いて政治宗教學問の力も亦大にこれが助けとなれることは勿論なりとす。されば主としてはその古來我が日本帝國の國民が有せる大精神、即ち日本魂なるもの、更に宗教學問等を同

化したるの結果に因るものとなさざる可からざるなり。斯の如き大精神の潜在せる事を完全に了解してこそ吾人は初めて爰にその民族的信念徹底せること、ならん、而して此の信念の根基は純正神道に於いて之を求め得るの外須らく他に亦その道あるべからざるべき也。

## 二 中心觀念

宇宙間の事物は必然的にして絶對無限の理法を包藏す、人の思想が向上して現實の境界を遠ざかり、大なる自然界の理法に近づき、其の理法に由りて以て考えを定むるところのものを理想となす、理想は大智達識なれば現實と離るゝことなきものにし



八  
て、彼の所謂る空想とは全く其の趣の異ならざるを得ざるなり、  
即ち空想は其の現實とは毫も關係なきものなれば、空想は由來  
何事をも實現する所の期なきなり、蓋し現實は理想の事實に表  
現したるものなれば、理想と現實とは實に影と物體との如く、相  
伴ひ相隨ふ。譬へば理想なるものは影にして、現實なるものは物  
體なり。物體ありて以て影を生ずるものなりと雖も、影は又別に  
その物體を照すところの光りなるものゝこれあるが爲めなり  
理想を尊重して現實を卑むは、事大根性にしてその極は遂に厭  
世に流れ、悲觀的となり理法に背けるものとなる、若し又現實を  
重んじて理想を排するときは、我慢強くして同情心に乏しく、利  
那主義の人となり、破壊的となりて以て理法に背く、何れも共に

九  
否なり、現實は差別にして理想は平等なり、差別に拘泥すれば理  
想を疎んじ、平等に執着すれば差別を無視するに至る、理想は大  
我にして現實は小我なり、理想は無味にして現實には情味あり、  
然れども若しその現實にして失意の地位に立たんか、理想に倣  
かれ物體を失ふて影を滅するの愚をなすべく、得意に居りて現  
實に誇り、光に向はざれば遂に影なし、光は自然の理法にして過  
去の理想は現代の事實を生じ、事實は理想の基礎となりて將來  
の事實を表現す。これ恰も絢繩の表裏隠顯して長きを致すに異  
らず、理想なき現實は破壊し、平等なき差別は維持せられず、兩者  
の平衡點は即ち中心觀念たり。  
それ科學は分解的の學問にて、現在の事實を基礎とし解説する



十  
所のものにして、哲學は推理綜合の學問なり。哲學は理想に近く  
科學は現實に近し、科學に由りて以て宇宙の大萬物の微は之を  
究むることを得べきも、哲學にあらざれば有無相通し、萬有綜合  
して以て宇宙の眞理を大觀することはこれなし得へからず、哲  
學の科學に透徹すること、理想の現實に透徹するが如く、哲學と  
科學との間には、自から不着不離の關係を存せり。  
人類以外に於いては宗教なしとは、吾人の信じて疑はざる所な  
り。蓋し宗教なるものは人類が徹底せざる所の信仰を満足せし  
めんが爲めの哲學的なる超越的の擬人格に依り、偉大なる先覺  
者が自己の信念を以て時の世道人心を救済し、安心立命を得せ  
しむるの教なり。而してこれ古今の聖賢のその時と場合とに應

じて立てしものなるも、其の義は皆一にして自然の理法に遵由  
せざるものはこれなきなり、凡そ教派の起れるは、時代の必要に  
迫まられ、これに應せるものなり、故に各教派の起原を調査せば、  
其の依つて起りし所以を明かにするを得べく、時勢の變遷に由  
り人の性行眞理に接着し、無味乾燥なるときは情を振興し、それ  
が又現實主義に執はれ、以て惡事醜行の熾んならんとするに逢  
へば、苦行して以て善事をなさしめ、其の心理の發動上に於ける  
知情意の分配をして平均ならしめ、以てこれが偏重偏輕なく、其  
の中庸を保維せしめんとして其の少なき方に對しては、主とし  
て教義を宣傳し、之が養成を努められたるなり、彼の釋迦如來の  
慈悲を説かれしは、其の當時に於ける印度の習俗が國民の階級



十二  
制度の甚だしく、ために現世に於ては到底歡樂を得ること能はざるに由り、佛の大慈悲心を以て一切平等に利益し賜ふことを教へ、其の悲觀をして樂觀に轉悟せしめて、人類を救濟せしに外ならず、耶蘇の教義を立つるも時人現實的に傾きて、其の或階級の民族に對し、非常の壓迫を加へ、堪へ難きものあるを見これを憫み、愛を説いて神の膝下に罪惡を謝せしめ、以て人類に幸福を與へんとしたるところのものたるに過ぎざるなり。神佛の奇跡の如きは、實に能く教義の尊嚴を保ち、人心を感化せしむるの方便として群衆心理、又は精神の感應術等を應用したるものなりとすべし、又偉人の行跡は吾人より之を見れば、世道人心を裨益する爲めに、一身を犠牲に供せられし所の至誠の結晶にして、實

に萬衆を感化せしむるところの力を有し、衆庶の信仰を集むるに足るべき神格は赫如として愛に具はる。孔子の仁を説かるゝも、其の他の偉人聖哲の世間に教を垂れたるも、其の意相同じきなり。  
安心とは人心の安靜意志の平和を得しところの状態なり。心は瞬時の間も休息なくして活動をなせるものなりと雖も、中心を得れば平靜に歸るものなり。譬へば盤上に旋轉する球が滑脱捕へ難きも、その中心を押すときは一處に止まり、人を乗せて踊舞せしむるも更に動くことなく、彼の彌次兵衛人形がよく指頭に立ちて墜落せざるが如く、その中心觀念に依りて以て能く支持せらるゝなり。



十四  
 教育とは先進者が後進を教導して自己の行爲に倣はしめ、以て後進者の天性を開發する所以の方法を名づけて云へるものなり。その親たるものがその子を育て、其の子の五官の機能をして發達せしめんことに努むるは、これ教育の素質にして人類保存の要道なり。其の教育は家庭教育、學校教育、社會教育の三種に分れ、而して人の幼時に於けるその家庭にあるや、父兄に依りて以て養育せられ、其の感化を受け少年となるに及んでや、學校教育を受け、成長して社會に立つ、人の一生よりして云へば、學校は家庭の延長されしものにして、社會の短縮されしものなりとなすべく、其の家庭にあるや人生の概念を覺え、學校に入るや人生の徑路を學び、終に社會に出で、以て人生の趣味を感得す。故に、更

十五  
 にこれを換言せば、家庭は社會の細胞にして人の父母とし、社會に活動するに至れるの本源たり。されば學校は家庭分胞の集團にして、兒童が社會の活動に至るべきの豫習場たりとすべし。而して吾人が茲に云へるところの教育とは、彼の普通教育の事にして、高等教育即ち科學的専門教育はこれを學術として觀るを至當となすなり。普通教育は學術の素地にして、人事萬行の基礎を作れるものなれば、宗教の如きも健全なる普通教育の振興に因りてはその効果を薄くする場合なきにあらず。譬へば恰もこれ暗を照すの燈火の太陽の光輝に會して其の光りを奪はれ、以て皎々を失へるが如し。宗教は人道の作興に必要なるも、人類の保存に必要なる教育に對しては同等なるものにあらざること



は勿論、教育なるもの、根底自然の理法に觸れざるときは、萬行  
齟齬して人道頹敗せん。而して其の人道の頹敗はその結果人類  
の危機を招致す、宜しく因果照應して之が方策を定め、天理の循  
環を扶けざるべからず。嗚呼吾人々生に於ける萬行の調和をな  
し、其の矛盾なからしめんことは、人類の命脈を社會に永久に維  
保する所以に於いて決して忽諸に附すべからずして、之が目的  
を達せんと欲せば、教育の中心觀念を必要とすることに留意す  
るところなかるべからざるなり。

### 三 敬神觀念

敬神觀念は教育の淵源なり。先進者が後進を薰陶するに當り、其

の薰陶を受くる後進者の心頭にして純潔無垢なれば、先進者の  
意思灼然として之れに移り、其の結果は後進者たるもの當に敬  
虔の念を以て其の教へを受くるに至るべければ則ち其の感化  
や必ず深遂にして教育を施すところのもの、權威益々加はる  
なり。惟れ其の敬虔の念の教育上(宗教を含む)に於ける必要たる  
所以なり。而して其の敬虔の念の顯然たるどころのものは、蓋し  
その神明に對して純誠を致すにあるものなるが故なり。  
抑も科學萬能の時代即ち科學の權威甚だ高く、社會の萬人物質  
的學問に専ら趨向せるのときに於いて學問の程度尙はや、淺  
ければ、則ち人々の敬神的觀念甚だ薄きが如きの状態を見るべ  
きものたりと雖も、而も其の科學も濫與に達して哲理に觸れ大



自然に接するに及んでは、自から科學の力の萬能とは云ひ難きを見るに至るべく、文明は自然界を征服するものなりと云ふ。雖も、その實は自然に従ひて以てこれを利用せるものたるに過ぎざるなり。故に自然の理に反するものは、進歩の程度高きところの社會には存在せず、而してその適者の生存を維保するは造化化育の理法たるべし。是れを以て宇宙間の生物はその何たるに論なく、この理法に隨はずしては素より生存するものにあらず。就中人類のこの理法に接觸して生活の安心を求めんと欲するの念の熾なることは、夙に聖智者の認識せるところにして、これその靈能の向上せるが爲めなり。されば敬神の觀念は人生の要道にして、教育は全然之れに依りて以て眞正の地位を保有す

べく、宗教亦之れに依りて以て自から權威あり。學術は之れに依りて以て乃ち進歩の花を開く。而して其の敬神たるものは所謂歸依の心腦にして、人の心裡動作の神明に歸向する所以の道なり。

神の邦訓を「かみ」と云へるは、即ち上位を「かみ」と云へる所以の意にして長者の義なり。また優越の意なり。偉大の意なり。道の眞理なり。彼の或る宗教家に於て云へる神たる偶像の如きものにはあらずして、これ實在のものたり、取りもなほさずこの神は自然の理法の換言にして、絶對的無始無終なる天地の徳化たるなり。吾人はこれを假に名づけて天理と云ふ。この理は實に宇宙に包容せらるゝものなり。



太元は物質と勢力とに因りて精氣を生ず。太元なるものは和親力(積極)と分離力(消極)の二性を備へて、造化の機能を司るものなり。而してこの太元なるや絶対的にして自然の理法なるもの、即ち此の中に存在せり。

宇宙大虚の中に於いて絶大の熱を有する星雲が浮遊し、劇烈なる活動を起し、分裂して無数の球體を成すや、その中樞を太陽として之れに附屬するところの無数の球體の連続する系統を太陽系と稱し、吾人の棲息する所の地球は其の星雲の分裂せし一球體の收縮せるものにして、清輕の氣は其の周圍に包繞して雰圍氣となり、溷濁なるものは凝滯して水陸となる。繁殖機能なき元素は化合して礦物となり、これに反し繁殖の機能を有せるも

のは、形狀を存留して生物となる。生物は又呼吸、營養、成長、生殖、運動、感覺等の諸官能を有し、その生物中に於いて根幹莖葉を有し、養料として礦物質を取て之を同化するものを植物と名づく。又分業盛んにして各種の器官能く發達し進歩の度高きものを動物と名づけ、其の動物中に於いて最も進化したるものは有椎哺乳類にして、その最も優勝なる靈能を具有するものは吾人人類なり。故に宇宙間の萬有なるものは、悉く太元の分化にして造化自然の理法に遵由せざるものあることなく、太陽と同素同元なるが故に、また光熱の化育を受けざるものなし、萬有の還元融合は報本反始なる所以にして、これ即ち理法の流轉たるものなり。故に敬神は合理にして、人類は殆んど先天的に敬神の觀念を有



せざるべからず。

二十二

#### 四 道徳觀念

人は萬物の靈長にして、理法は人生に於いて最も完全に能く發現するものなり。道徳は道の諦得なり。道理の實踐なり。道理は古今一貫の眞理たるものなりと雖も、世道は誠に多岐にして迷ひ易く、人心は甚だ多端にして動き易し、これを以てその時と場合とに依りては道徳の標準を異にするものあるかの如く見ゆることあり、然りと雖も天然の正しき道理に隨はんと欲する所あるは、人の人たる理の存する所以、如何なる邪惡の人と雖も、必ず多少これが天然の正しき道理の觀念を存在せざる所のものこ

道理の實踐

善惡の標準

禍福輪轉

良智良能

れなきは、これ人の理性は元來向上にして善なるものなることを證明するものにあらずや、故に若し之れに反するものなることは、外界のためになれるの墮落にして、自然理法の僞りに出づ、性はもと善惡なし、唯外迫の刺激に遇ふて而して其の方向を異にせしものたるに過ぎず、それ善心ありて以て善道を実行するところのもの、即ち之を道徳の人と號するなり。故に如何に善心ありて以て其の目的とするところは善なりと雖も、その實行の之なきものは之を道徳に叶へりとは云ふべからざるなり。禍福はその境涯の順逆隠現せる迄のことなり、徳は得にして充實なり、又充得なり、善良の智を以て道を求め、之れを能くす即ちこれ道徳の完全なるものとすべきにはあらざるか。

二十三



人生はこれを過去の祖先に享け、以て之を更に未來の子孫に贈るところの中驛なり。故に人生れてこの世にあるや、其の多岐多端なる人生の驛に於いて堆積せる所の貨物を整理し、以て其の輸送すへきはこれを輸送し、其の配達すべきは之を配達し、毫もこれが澁滯をなすことなからしめざるは、驛長主事たるべきところの吾人人生の當さにこれ盡すべきの任務たるなり。されば吾人人類のこの天命を奉じ、以てこの中驛に在るや、これが輸送し若しくは配達すべきの職務に従へる以上は、必ずその現在あるところの事實を中心となして以て貨主たる心の指定せし所に誤らず、其の目的を遂行せざる可からず。而してその人生の本能は誠に造化の理法に従ふにあり、これに従ふものゝ任務を果

せるに於けるや、先づ生殖を第一義となす、これその人として生命の無限に及ぼし断絶なかるべきを欲するが故なり、素より其の生命の無限に及ぼし断絶せざるべきをなさんと欲す、必ずや營養と保護を要す。優越を第二義とす、優越なる者生存に適すればなり。尙ほ又人生には教育を要す。生命(靈肉)を祖先に受け、これを子孫に贈遺することは、彝倫(性)にして之れをして完全に優越たらしめんとせば、修養(格)せざるべらず。孝道は彝倫の大綱にして人生の經なり。訓練は絢爛にしてその緯なり。これが經と緯と合して堅くこれを組成して所謂人道なるものゝ行はるるなり。人の道愛に行はれて愆らず、之れこれを道德と謂ふなり。道は身血にして脈管を通ふところの血液の如く、天理運行の法、人類歩



行の徑路たり。徳は身に添へることにして實行のその身になれる所の事たり。吾人はその人たるの道を知れると共に、直に之れが實踐をなし、以てよく目的の域に達し得るもの、これ之を道徳完全のものと言ふ豈不可ならんや。

### 五 民族精神

生物は聚落す。殊に人類は群簇して生存す。人類の繁殖して一群の集團を爲すや、これを民族と云ふ。民族は自己の擴大したるものなり。而して其の民族の發展に伴ひ、氣候風土の感化と他の民族との關係に依り所謂民族精神なるものを生ず。蓋し其の民族精神とは個性心理の聚合に成れる所の形而下の團塊なり。斯の

團塊か更に又一の大なる個性的となり而して以てまた因果相應報す。而して其の群團やまた更に集まりて漸次大をなし、遂に民族の生存上必然的の要求として爰に國家なる者の形成せらるゝことゝなる本來民族には優劣なく、精神には貴賤なきもの、諺に云ふ産みより育ちなりと、即ち教育に依りて以て其の民族に優劣を生じ其の精神に貴賤を致すの差異を見るものなり。即ち人生もと明暗賢愚の別を有せず、その之が別を生ずる所以の者は他なし、學ぶと學ばざるに依る。嗚呼教育のこと曷ぞ重くこれが留意する所なかるべけんや。而して其の教育なるものは廣義の意味に於いては、我が國の精神道徳を基礎としたるものたらざるを得ずして、その靈肉造化の太初より世々分體し繁殖



するに従ひ、自から之をして優秀ならしめんとする處の自主的誘導をなすの精神なり。抑も民族精神なるものは之を換言すれば則ちこれ民族の根性のことにして、即ち國家をなせる生民の心魂なり。中庸には天の命これを性と曰ふとあり。實に天地根元の精氣自然の理法に従ひて肉體と共に造化せられ、以て智、情、意の三者を具へ、遂に思想となりて顯はる。故にこの民族的精神なるものは、其の民族が固有的住み來たりし邦家の民族にあらざれば真正にこれを了解し難く、即ち神州の民族的精神は神州の人にて始めて互にこれを相談するを得べきのみ。嗚呼我等神州の人にして神明の子孫を標榜せるものに於いては、須らく神州の民族の精神を發揮するに努め之れを健實に養成し、且つ發

現して以て神州的天賦の使命を全うせんことに努めざるべからざるなり。

## 六 國民の教養

日本民族の精神即ち所謂日本魂なるものは、皇祖皇宗の國を肇むるの時に當り、敬神の意義を明かにし之れを根本として國民を教化養育し給ひしに初まり、我が帝國の國民性とし讃譽すべきもの、其の中にはこれを仔細に取調ぶるときは、長短強弱等多少の差異あるを免れずと雖も、その神を敬し清淨を好み義に勇める點は誠にこれその特長なるものとす。抑も敬神なるものは神明を尊敬する所以のものにして、其の神



三十

明とは長上の幽玄に歸入したる靈格なり。尊敬はこれを展べて上下に通じ、其の上に及ぶものは敬順となり、下に及ぶものは慈愛となる。父母に孝に、夫婦相和し、兄弟に友に、朋友相信するは、皆尊敬の泉の湧き出でし所の大倫なり。清淨は純潔にして身にも心にも汚穢なく、且つ執着なく、犠牲的たり、其の身體を清潔にすれば強健となり、心裡に汚穢なければ至誠となり、以て神に交感し人に順應することを得べし。古來禊の儀あり。事初め場合に於いては必ず修祓の式を行ふ。清淨なるものは修身の要義にして、恭儉己れを持するにも博愛衆に及ぼすにも學を修め業を習ひ智能を啓發し徳器を成就するにも、皆斯の心の發露にあらざるはなきなり。義勇は日本魂の事實に顯はれたるものにして、上古

より武を尙び身を練り邪惡を膺懲するの具となし、而して其の義を見てこれに勇めるはこれ我が日本民族性の長所たり。由來勇武は粗暴に流れ易きものなるによく義を失はず、これ其の理に於いて大に稱道すべき所以のものならずとせんや。義とは事の宜しきに適せるの謂ひにして、素よりこれ其の平和を意味す。然れども其の平和は絶對のものにはあらず、優勝劣敗は進化の理法なれば、競争中に於いて其の宜しきを求めんと欲する所のもの、平和なり。故に平和の目的のためならば干戈を執るも可なり。即ち其の干戈を執るは侵畧のために執らず、暴亂を興すために用ひず、其名の正しきを以て己むを得ずして干戈を執る、これを武士道の眞髓とはなせるものなり。それ各自が業務に就き、



世務を開き、國法に従ふて國憲を重んずるも義勇の念の潜めるが爲めにあらずや。一旦緩急あるに及んでは、身を挺して公に奉ずるは、我が帝國々民の本懐とする處、發しては萬朶の櫻となり、疑つては百煉の鉄となるとは實に我國民の有せる正氣にして、これ實に所謂我が帝國民に存する所の氣風なり。斯くの如き國民性に於けるの粹を發揮し、世界文明の長を採りて、以てこれに同化せしめ、我が民族性の短なるところを補填せしめ、能く優勝發展の域に達せしめんと欲せば、宜しく國民智徳の教養を忽かにす可からず。國民智徳の教養に於いては立國の精神と國體の意義とを充分に明かにせしめんことに努むるにあり。

## 立國の精神

蓋し我邦皇祖皇宗その國を肇め賜へるや(吾豐葦原の瑞穂國は吾子孫世々主たるの地なり行いて治す)

(こべし)萬世一系の皇基を定め君を立て民を統治せしめ、君は天祖の命じ給へる處にして、我が國君は至善の尊位なり。至善の尊位に依りて統治を受くるところの民衆は、上に至誠を致して以てその主權の尊嚴を増す。君臣の分自から明かにして情誼甚だ温厚なり。是れ義は君臣なるも、其の情は父子なりと宣はせらるゝ所以なり。吾人は其の皇祖皇宗の詔訓を遵奉して忠勤恪行せし祖先の行爲を繼承し、これをその身に行へることこれ其の君に忠を盡すにありて、之を取つて以て父子の私道に移さば、孝と稱するの名目を附すべし。故に忠孝は本來の性質は一にして、只その君に對するのと親に對するとの差なるのみ。寔にこれ我が國民道徳の根本を爲すもの、天祖が統治權授受の確保として三種の

## 國民道徳の淵源



神器を天孫に授けられたるは意味深遠にして吾人の度り知る可きにあらずと雖も、その尙武的人類として必須なる用器の劍と寶石を統へたる璽と明鏡との三個を撰はれたるものは、その建國の精神が全く人類の平和を希圖せられし事明かなりと謂ふべし。如何となれば鏡は明かに影を移し儀容を正すべく、又劍は勇武を標し他の侵害を妨ぎ、璽は五百個統玉とて財貨を配列し有無融通する所のもの、即ち經濟を表す。それ他の侵害を受くることなく、衣食住を充實にし、容儀を正し、禮節を知り以てその身の安心に生活するを得るは、これ豈吾人人類として無上の幸福たらずとせんや。右に述ぶる所を推して考ふるに、三種の神器曷ぞこの暗示の意義の國家の上に於ける素よりこれなしとす

べけんや。其の國家としては教化軍備經濟の必ず缺如すべからずとする所以のもの、三種の神器の暗示に於ける知るべからざるか。一面人徳の上よりして而してこれを見れば、これ固より智仁勇の三者に配することを得べく、吾人はその何れにしても神器はこれ其の至尊皇位の儀表たるべきのみにあらず。國民の精神を統一維持する標的たるべきなりとするを信する者也。抑も我邦に於ける家族制度の重んぜらるゝ所以のものは、天祖の神器を傳へらるゝに當り、猶吾視其殿床可奉齋と勅らせ給ふに依り、天祖と同棲せさせ給へるの意味にて神器を宮中に奉齋せられたりしが如く、その父子同居は孝道の行ひ易くして、親愛



の情一層深くなるべきものなり。  
 國民の教養は其の目的たるや、これ國體擁護にあるものなれば、  
 我國に於ける教化の方針は忠孝を以て經とし、尊敬清潔義勇等  
 を以てこれが緯となし、これに智仁勇の三徳を綯酌して淬礪の  
 誠を盡しなば、個人としては應に完全の人格を作り得べく、而し  
 てその教化軍備經濟の完全を期し、益々これをして發展せしめ、  
 己れを修め家を齊へ閭里を賑はし國家を富強にし皇運を扶翼  
 し邦家の命脈をして天壤と共に無窮に振興し、以て天下をして  
 平和ならしむ。これ日本民族の理想たり。嗚呼、これ日本民族の  
 理想たるなり。

### 七 純正神道

純正神道は敬神の道なり。吾が皇祖皇宗が國を肇め給ふの時天  
 神地祇を祭り、報本反始の典を擧げ、以て大孝を伸べさせ賜ひ、衆  
 庶をして矜式する處あらしめらる。

我邦の上古に於けるは實に祭政一致の制にして、政治の邦語に  
 於いてこれを「祭り事」と云ひ居れる所以、而して又毎年政治始に  
 於いて天皇の先づ神宮祭祀の事を聞召され給はるゝの例ある  
 所以なりとす。されば敬神の念は我が日本民族に於けるの特性  
 なりとなすべく、この神は實に吾人人類を通じたるどころの造  
 化實在の至靈にして、素より他の宗教家の禮拜尊信の目的物と  
 なせる偶像の如きにあらず。敬虔の念を以て神を待ち、神に接し、



神に仕ふるの事を行ふ、その道これ所謂神道なり。單にこれ神の定められたりし道と云ふにはあらず。神の行ひ給ひたる道を云ふ。蓋し道なるものはこれ條理の事にして素より通せざる處なし。純正神道は皇道の根基にして教育の本源なり。皇祖は惟神の命に遵ひ皇位を定め給ひたるものなれば、即ち其の命を奉ずるはこれ亦神を敬する所以にして、皇道は是に依りて以て振起すべく、其の造化の後繼が教育の綱領なるものなりとせば、則ち國民の教育は敬神を基礎とせるものならざる可からざるべし。吾が日本帝國に於ける國民教育の淵源は、今や忠孝に存せりとなく、すところのもの多きは、上述を玩味せば其の意窺ひ知るに難からざるべし。

蓋し我が神州に於ける神道は、あらゆる宗教の祖道にして、且つ其の諸宗教の宗本たり。由來人の思想の安定は中心觀念にあり。故に心頭に一片の思想の發せんとするや、先づ前後、左右、彼我、過去、未來等に想到し、中心觀念ありて以てこれが分量平均せざれば、思想の安全は得ること能はざるものなればなり。されば敬神を以て中心となし、人道を行ふに於いては、國の文野を問はず有象無象支梧抵觸することなかるべきなり。彼の釋迦の「山河、草木、悉有成佛、況んや性あるものに於ておや」と云へるが如き、及び基督の神の愛を説ける如き、並に孔子の「言は忠信行は篤敬雖蠻邦行矣」等は、皆これ敬神觀念の充實せるが爲めなり。而して此の觀念を基礎として以て教を立てたるもの即ち宗教たるか故に、宗



教には必ずや信仰の標的(偶像の神佛)たるものと、及びその教祖と教典との三つの要素を備ふるなり。しかも神道には偶像に成れるところの標的たるものあることなく、教祖なく、又教典なし。唯その天理人道に遵由する敬神の作法、即ち神明を尊敬するところの條理のみあることなれば、素よりこれを道と稱し、以てその教とは云はざるなり。蓋しそれ神道の稱呼は勿論佛教渡來後に於いて起りしものなりと雖も、斯道は其の以前に於いて既に久しく存在せるところにして、神州に於ける上古よりして傳來せり。彼の上宮太子は儒佛を併せ論じて以て聖の絶極となし、佛典は西説の神道にして、儒教は蕃説の神道なりとなす。余は更に之に加ふるに、耶蘇教を以て歐米の神道なりと云はんとす。而してその

教の形式に顯るゝ所は各異なりと雖も、而もこれ其の道は一なるが故なり。

夫れ宗教は道に入るの門なれば、その重んずべきは吾人の今更愛に嗶々を要せず、然れども門なきも道は通ず、門を設くるは宗教の權威を示すが爲めなり。信仰徹底すれば宗教は要なし、神明は實在にして偶像崇拜の類にあらず、造化の機能は純理にして實在なり。基督はその純理を形容して天父と稱せり、是れその無形的偶像なれども、聖基督は神明に感孚せるなり。釋迦は眞如を以て佛陀となすも、純理を形容したる有形の偶像を拜す。儒教は宗教にあらず、固よりこれその道德の教なるも孔子は純理を以て天となし、則る處の道を示す。天の命を性と云ひ、性に從ふを道



國體と皇  
道  
宗教政策  
の不徹底

と云ふ)其の他の現時世界に存在せるあらゆる宗教は、皆其の根を同ふするを見ざるはなし、是れその吾人が神道を以て宗教の祖道なりとなす所以なりとす。蓋し世に説をなすもの神道を國體神道、神社神道、教派神道の三種に區分せるものあり。然れども吾人の見地よりすれば斯の如きの區分をなすは、却つて世人の惑ひを惹起し、真正神道を傷害せることなきかを思はずんばあらず。抑も吾が帝國の國體は、皇道の發現なるものにあらずや。神社は神明を祭る所、建國の神勅にある神籬なり。即ち敬神崇祖の大孝を申ふる儀禮を行ふところの齋場なり。神道には國體、神社の別をなすを要せず。其の教派に神道を稱するものあるは、神道を誤解するものたるの恐れあり。これ等は宗教政策の不徹底よ

信教の自  
由と信念  
の徹底

りして慣用語となりたるものなるも、これを真正の理法に映照して考察するとき、吾人は誠に其の謂はれなきものたることを信するものなり。吾人の今茲に純正神道と云へるところの名を挙げし所以のものは、斯の如き教派的世俗の神道を混同し、以てこれが爲めに國體の尊嚴を傷くる事をなすなきかを憂ふる所あるが故なり。有識先達の士宜しく茲に留意すべし。必ずや吾人は其の神道をして世に行はるゝ宗教の上に超越せしめ、以て神明禮拝的教派をして妄りに神道の名稱を用ゐしめざらん事を望まざるを得ず。信教の自由は素よりこれ憲法上に許されたる特權なりとは雖も、國家を離れたる憲法なきと共に、國體の尊嚴は民族精神の發露に依りて以て維持せらるゝ所のものなれ



ば、民族精神の破壊は断じて之れを許すべきものにあらず。殊に民族精神の根底が眞理に透徹せるものなることを思へば、亦何を苦んで渺たる學說に拘泥するの要あらんや。吾人は茲に更に一步を進め、皇道の根基國民教育の本源たる純正神道の眞髓を左に述べんと欲す。

夫れ純正神道とは敬神の道なり。目に見えぬ神を敬ふと云へる事は、世界何れの國の人たるに論なく、之れを考えざるものはなし。其の世が文明となるに従ひて、何事も人の智恵に依りて出來得ると考え居るところの者は、強いて神の事はこれを云はざれども、智恵の根元を探ぐることに彌々深く、大なる自然に觸接するに及んで初めて神を敬ふの念の起るものなり。宗教家は人を教

化するに當り、その信仰の的として必ず神を立て居れることなるが、宗教家の所謂神なるものは、教祖が自己の信仰よりして至善の神格を顯はせしものなり。これ即ち人をして至善の神格に觸れしめ、以てこれを教化することに努めしものなり。抑も吾が國古來神明を敬ふの風あることは、肇國の初めに當り、其の祖宗の遺旨を繼承祖述せるものたるに過ぎず。故に大和民族の敬ふ處の神明は、造化の機能を享けたる祖宗と、これに協力扶翼したる偉人の精靈とが人格を離れ神格を得たるものにして、神明を崇敬するは靈の融合を計り、これに感應せんが爲めなり。故に神道は更に之を擴説すれば、神明を敬するところの道にして、即ち敬神的觀念に於ける表現の儀禮たるなり。民族思想の根本なり。



其の神人交感を以て宗教の本義となすとすれば、神道は宗教の本義に適へるものにして、而かもこれ其の宗教にはあらず。宗教には既に前にも述べし如く、その主神と教祖と教典とを要することなれども、神道には特定の主神なく、教祖なく、又教典もなければなり。然りと雖も神道は又宗教の要義にも適へるが故に、如何なる宗教もこれを攝取して以て國民教養の資料となし、相悖ることなき父子相傳の思想なり。かくの如く普通の要道を執て以て一派の宗教となし、これが信教を強いんとするは誠に固陋偏狭の見識なり。然るに人類の幸福を享受するはこれ宗教の本願なりとなし、國境を逸脱し、世界的に之れを施さんと爲すものあるも、これ亦甚だ誤れるの思想にして、復たその固陋たるを免

れず、それ水は容器に従ふて其の形狀を變ず。而かもその水は性質の本能を失はざるべきにあらずや。宗教も亦同じく國に入りては其の國體の擁護をなし、國民の幸福を享受せしむるが本領なり。宗教の推移も最初は智的に興り、情的となり、遂に意的となる。自己の本位は民族にあれば、幸福享受の最大目的は、民族擁護なり。人生の意義は自己の保存なり。即ち真正なる教育の目的は、自己保存の遂行にあれば、勿論宗教に超越せり。教育は敬神觀念の上に築きたる道徳を基礎とし、人生の意義を全からしむるものにあればなり。

神祇は神明の鎮まり坐せる處にして、神明に奉仕して祭事を司るものを神職と云ふ。神職は布教師にはあらず、司祭者なり。祭典



は神明を饗應する儀にして潔齋して精神を鎮め、神靈に接遇し、相交感するにあり。精神統一して靈肉一致の境涯に住する時は、宇宙の大靈に歸入し、融通無碍なり。奚んぞ神明に交感するを得られざらんや。抑も別天五神は獨化無形にして、天の御中主乃神は宇宙の太元に座し、高産靈神神産靈神は分離親和の二性を備へたる兩極なり。宇麻志阿志珂備比古邇神は地球の形體に顯はれ、天乃常立神は地球を圍繞せる雰圍氣にあり。天神七代の中國乃常立神は陸地に顯はれ、豊雲野神は水に顯はる、尙ほ獨化無形なり。宇比地邇神、須比智邇神、角杵神、活杵神、意富斗能地神、意富斗乃弁神、淤母陀琉神、阿夜珂志古泥神、伊邪那岐神、伊邪那美神は共に偶生にして、萬物造化の順序に依りて以て出生せらる。中にも

那岐那美の二神は、實に人類の祖神たるなり。地神五代は日本民族の祖にして祖神の命を持ち、天照大御神は高天原を治し、月讀命は夜の食國を治し、建速須佐之男命は海原を治せらる。天照大御神建速須佐之男命と契り坐して、正勝吾勝速日天乃忍穗耳乃命を生まれ給ふ。命降臨を辭退せられ、萬幡豊秋津師姫乃命と配し、天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇々岐の命生れ、初めて降臨あらせられ、木の花佐久夜毘賣の命と配し、天津日高日子穗々手見の命、妃豊玉毘賣命、天津日高日子波瀲建鵜萱葺不合の命、妃玉依姫命を経て、其の御子神倭伊波禮彥の命は人皇の始に坐まし、辛酉の年に於いて即位の禮を擧げらる。姫多々羅伊須支依姫命を皇后に冊立し賜ふ。これ我が大日本帝國の紀元たり。傳國



の璽としては初め天照大御神の命以て豊葦原之千秋之長五百秋之瑞穂國は我子天忍穗耳命の所知國と言因賜ひて降臨あらせられんとしたるに、國の擾ける状をみそなはして、諸神に相謀られ、建御雷乃男の神に天の鳥船の神を副へ、豊葦原の中國へ下され、國土平定の後、天孫日子番能邇々岐命に改めて瑞穂の國へ降り行いて善く統治せよと仰せ付けられ、邇々岐の命は天の兒屋命、太玉乃命、天乃宇受賣命、石許理度命、玉の祖の命の五部屬の長を以て、夫々役目を配り當て、御供に従へて降臨あり、其の時天照大御神は八咫の曲玉、八咫の鏡、草薙の劔の三種の神器に、常世の思兼の神、手力男の神、天の石門別の神を副へ賜ひて、此の鏡はわが魂として吾を敬ふ如くにあがめ奉れ。次に思兼の神は之

に關する事を引き受けて取り行へど仰せられたり。此くの如く三種の神器に主護神を副へられたるは、その意味實に深遠なること知るべきにあらずや。遠津神は雲の如く、祖宗の神は蒸氣の如く、吾人は水の如し、水が蒸發して雲となるは人逝きて神となるものに同じ。水の蒸發するは人の向上して神明に敬畏するに似て、雲の凝つて雨となり下降するは、恰も神明の慈愛にして仁澤子孫に及ほし長久繁榮するが如きなり。神道は父子の情愛の如く、一家の中心となり、君民の義理の如く、一國の基礎なり。又子弟教育の本源たり。須らく敬神を以て民族精神の眞髓となし、國民の教養を爲さば當にその誤りなきを庶幾し得べし。宗教は師道にして人道擁護を目的とす。故に宗教な



るものは師弟の關係の如し。師弟の信も父子の情は犯す能はず。何となれば父子は主にして師弟は従なればなり。されば師道家に入ると雖も、孝道を傷く可からず。唯これが孝道を補佐すべきのみ。宗教は人心の緩和に於いて利益あるも、民族の精神を基礎とし探長補短民族の幸福を計ること肝要なり。神道は民族精神の基礎なり。氣候風土異なるに従ひ、各其の特質を異にす、基礎觀念の乏しきものは理法に遠かるものにして人道の敵なり。師道は學ぶべきものなれども強ゆるべきものにはあらず。民族精神に契合せざるところの教は、民族の幸福を阻害すべきものにして、斯くの如きは斷じて之をして宣傳せしむ可からざるなり。古來諸種の宗教が努めて民族精神に同化せんと欲するの状ある者

は、此の意味を尊重せるが爲なり。これに適する者の振興するは眞理なればなり。儒教の忠孝にしても支那と日本とは實際に於いて大に異なれり。佛教の本地垂跡も我が日本帝國の民族精神に冥合せしめんことを計れるものなり。基督教の傳來は佛教、儒教等に比すれば、日尙は淺く、未だ冥合せざる所のもの素よりこれありと雖も、道者の研究圓熟すれば、亦茲に至れることは必然のことなるべし。开は大悟徹底と云へるはこれその理の極に到達したるものなればなり。神道を以て強いてこれを宗教となし、その信仰を強いんと欲するは、宗教を以て民族精神を破壊せんと企つるものと何ぞ其の撰を異にせんや、誠に戒むべきものたらすんばあらざるなり。宗教家には或は往々自己の地位に絢綽



を附けんと欲するの念に捕はれ、宗教は世界的のものにして民  
族精神を頑固なりとして之を罵れるものありと雖も、これ自己  
の暗昧を吹聴するものなり。勿論宗教には國境なく、何れの民族  
たるを問はず、之を信するは固より自由なり。然りと雖も自己を  
忘れて之を信するは、これ真誠に信する所以にあらず、其の實は  
精神が信仰的捕虜とせられたるものなり。即ち所謂迷信なり。信  
は自他對照ならざる可からず、彼の宗教を世界的なりと云へる  
は、何れの人類がこれを信奉するも其の民族精神に悖ることな  
く、融通無碍なるところの真正宗教を指したるなり。民族精神を  
頑固なりと云へるは、他民族の存在を知らず、或は之を知ると雖  
も他民族が宇宙間に於けるの同元なるべきを思はず、實際これ

を卑しきものとなし、以て排斥するが故なり。歐米人が自己の物  
質的進歩の偉大を誇り、東洋人を排斥するは皆その心の頑固を  
表せるものなり。されども斯かる現象は多くはこれ無識文盲の  
徒輩の陥り易きところの境涯にして、人道の敵なり。民族精神の  
確立は自我の實現なり。個性の包含なり。何ぞこれを頑固と云は  
んや。而かも民族精神の基礎が宇宙的にして人道に適合せるも  
のなれば、頑固なる謂れは固よりあることなかるべし。  
神道は宗教にあらずして人の道なり。家の道なり。國の道なり。皇  
道なり。又天道なり。道は教育に依りて以てその完全なるを期す  
べきなり。宗教は道の指導者たるものなり。猶ほこれ盲目者の杖  
に於けるが如きもの、目明かなるに至らんか無論所用なし。然れ



主觀的  
信念

客觀的  
信仰

國民  
信念  
の統一

五十六  
ごも世の中は盲千人、目明千人なれば、矢張これが必要あるなり。宗教は道の擁護者なり。師の道なり。信仰に依り感化す、道は主觀的に信念を要し、教は客觀的に信仰を要す。神道は國體の淵源なれば國民の信念を統一せんと欲せば、斯道の振興に待たざる可からず。社稷の祭祀を政治の根本となし、神武天皇橿原宮を建つるの令中に上は則ち乾靈の國を授けたる德に答へ、下は則ち皇孫正を養ふの心を弘め云々。又天神を郊祀し用ゐて大孝を申ぶ可き者なり云々とあり。祭政一致を以て國體の用となし、忠孝一本を以て道德の體となし、其の美を濟さん事に努むべきなり。而して科學選擇にも宗教選擇にも自己を中心とし、益あるものは之を迎へ、益なきも害なきものは之を認め、その害あるものに至

教義  
選擇  
の標準

人格  
の向  
上

人格  
と神  
格

つては宜しく之を除斥すべきなり。自己は國家民族を通じたる自己にして、自己を擴大すれば國家民族となる。故に自己の擴大は犠牲にして、擴大し能はざる自己は、滅亡すべし。これ人の處世に於けるの眞理なり。其の神明を敬畏し、國民道德を振興し、邪說迷信を破り、堅實なる信念を養成し、以て人生の意義を全からしめんとするは、則ち斯道の本領にして人格向上の要義たるなり。

## 八 結 論

人格なるものは靈肉の結合せる場合に於いて顯はれ、靈が肉を離れて而して後に神格を得らるべきなり。神人ともに格式の高卑は權威即ち感化力の大小に依りてその分別をなすべし。靈肉



生活的安  
心

日本魂の  
三態

共にこれ縦横すべきものたるも、靈は時としては横溢し、時期を異にしてこれが活動をなすことあり、然れども靈は肉に依らずして獨り發顯するものにあらず、肉は亦靈を得ざれば單獨には活動せず、肉は食の營養を取りて以て成長し、衣住を以て保護す、即ち衣食住の充實は人生の安心を助く、靈は心の本體にして、魂（心）は靈の作用的現象なり。魂の作用は分化して智情意の三者を構成す、即ち日本魂に和魂、荒魂、奇魂と稱するものありと云へるは即ちこれなり。和魂は意にして節制の力を有し、荒魂は情にして活動の力を顯はし、奇魂は智にして判断力となる、三魂の關係は恰も皇祖が三種の神器を皇孫に授けて皇位の表徴となし、軍備、教育、經濟の政綱を確立し、智、仁、勇の三徳を示されたるに同じ。

至善の神  
格

事想一如

永久の生  
命

教育の權  
威

故に天皇の神聖なるは至善と唱へて至善なればなり。純正神道は惟神の大道なれば、これを民族精神の根本となして中心觀念を保ち、以て哲學と科學との調和をなし、有は無に通じ、無中亦能く有を生じ、現實にして理想に冥合し、活動を起して其の靈の要求としては生命の永久を爲し、肉の要求としては衣食住の充實を圖り、又自制しては自心を知り、天命を悟りて其の分を安守すべく、活動と節制とに偏頗の事なからしむるは判断力なり、而して其の生命存續の方法としては教育の力に依りてこれを求むべく、家庭に於いて保育し、學校に於て教導し、社會に立ちてこれが實行を期せしむ。實行には常に道を求めて息まず、これ道德觀念に厚き所以なり。生活の保護は政治の力に顯はれ、安心立命の



政治宗教  
の力

信念の  
底

啓示は宗教の力を借りて發揮す。世界の智識を集め、各種の宗教を包容攝取してこれを同化し、斯民教養の資料となすは神道の存在せることあるが故なり。純正神道は單純にして直覺なるもの、唯これ敬神、崇祖の儀たるに過ぎず、至誠神明を崇敬し、潔白にしてその身を守り、元氣を養ひ安心活動すれば、則ち自から報本反始の實に叶ひ、完全なる人格を得べく、これを古今に通じて懲らず、これを内外に施して悖らざるべき理想を實現し、能く東西兩思想の調和をなし、以て平和の中心となり、世界の人類を化導し、衆庶の幸福を増進せば、乃ち天命を全うするものたるに庶幾からん歟。

六十

純正神道に依り立てたる信條

欠



欠



終